広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	中国における「空き巣老人」の社会現象をめぐって : 老いに関する日中比較研究〈研究論文〉
Author(s)	松井, 富美男
Citation	HABITUS , 16 : 27 - 41
Issue Date	2012-03-20
DOI	
Self DOI	10.15027/39007
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00039007
Right	
Relation	

中国における「空き巣老人」の社会現象をめぐって

－老いに関する日中比較研究－

松　井　富美男

（広島大学）

1．はじめに

日本語の「手紙」は中国ではトイレット・ペ―パーを表し、ホテルを意味する中国語の「酒店」は日本では酒屋さんを表す。このように同一の漢字であってもその意味内容が日中で異なる場合もある。「空き巣老人」もその一例である。この語は現代中国の老人問題を端的に象徴し、中国ではごく普通に使われている。言うまでもなく、こういう表現は日本語にはない。ただし、「空き巣」という語は日本語にもあるが、通常はこの意味と異なる。「空き巣」という語はもともと「使わなくなった鳥などの巣」[1)]を意味し、そこから転じて「人のいない家」を表すようになった。「空き巣狙い」とはそうした留守宅を狙う泥棒をいうが、「空き巣」だけでも意味は同じである。この日本語のイメージからすると、「空き巣老人」も空き巣を狙う老人を表しているように思えるが、そうではない。

中国語の「空き巣老人」というのは、一般的には「子女が家から離れた後の中老年の夫婦」[2)]をいう。すなわち、成人して仕事、勉強、結婚等の理由で家を出ていった子どもの親のことである。したがって「独居老人」に限らない、「中年」も含まれるし「夫婦」も含まれる。日本ではこの辺りのニュアンスが正確に伝えられておらず、「空き巣老人」と言えばすぐさま「独居老人」と同一視されがちである。「空き巣老人」がこの意味だとすれば、「空き巣老人はさびし

がりで、不眠、自律神経異常、高血圧、冠状動脈心臓病、消化性潰瘍などの病気になりやすく、また他人の妨げとなるために、心身の介護が必要である」[3)]などといった説明はかえって誤解のもとである。

そもそも自然界では「巣立ち」はよい意味で使われる。「巣立ち」には、子どもが成長して独立することを意味すると同時に、親が「子育て」という一定の任務から解放されて自由になることも含意する。それは当の子どもにとっても親にとってもよいことである。晩婚夫婦の遅くにできた子どもであれば、子どもの「巣立ち」時期が親の老年期に重なる可能性もある。その場合には身体的、精神的な不調が子どもの「巣立ち」によって一挙に吹き出す可能性も否定できない。だが二十代後半夫婦の子どもであれば、子どもの「巣立ち」時期に親は四十代の中年であろう。とすれば、この時期の子どもの「巣立ち」が「さびしさ」をもたらすというのはどういうことか。日本人からすれば、やはり違和感がある。

リーマンショックの影響はいまだに色濃く残り、今日でもなお世界の金融市場は混乱を極めている。その影響を受けつつ、さらには東日本大震災や福島原発事故の影響も加わり、日本経済はマイナス成長に転じ、戦後経済の中でも最も深刻な八方ふさがりの状況に陥っている。こうしたなか日本の若者は将来に不安を感じ確固とした信念を持てずにいる。このような社会情勢が若者の精神状況に大なり小なり影響を及ぼしているのは確かである。大学や大学院に進んではみたものの、思ったような就職口が見つけられずに自信喪失になり、鬱になる若者が増えている。

こうした社会状況では親も気が気ではないであろう。都市では親も一緒になって就活をしているという噂がまことしやかに伝えられるのは、事実かどうかは別にして、それなりに理由があってのことであろう。もし自分の子どもが社会進出に失敗して自宅に籠り、いつまでも「巣立つ」ことができないとした

ら、それこそ親の苦悩はいかばかりであろうか。このような状況では「巣立ち」はむしろ歓迎すべきことであって、けっして「さびしさ」の対象ではない。だから日本人の目からすると、空き巣老人が「さびしがる」という記述は寝耳に水でしかない。この社会現象は中国政府のプロパガンダや誇張ではないかと疑いたくもなるが、中国社会の実態を反映している。それはどのような意味か。

2．家族構成の変化

中国には「五世同堂」や「四世同堂」といった言葉がある。五世代は曽祖父母—祖父母—父母—子－孫をいい、四世代は祖父母—父母—子－孫をいう。かつてはこれらの世代が一つの家や部屋で暮らすことを意味したが、現在では別々に暮らす世代が春節などで団欒するときに使われる。これほど多くの世代が一家族を形成するわけだから、言うまでもなく大家族である。中国には昔からこのような血縁関係による大家族が存在した。しかしこうした大家族も恒常的に存続したわけではない。曽祖父母を核とする家族は彼らの死によって消滅し、祖父母やその兄弟姉妹が新たな家族の核となる。同じように祖父母を核とする家族は彼らの死によって消滅し、父母やその兄弟姉妹が新たな家族の核となる。このように大家族といえども分裂を繰り返しながら新たな大家族を形成していく。中国社会はこれまでこのような過程を千篇一律に繰り返してきた。

しかし改革開放以後様相が一変する。急速な経済発展の下で核家族化が進行し、農村は別にして、都市では父母と子という３人家族が中心になりつつある。これには「一人っ子政策」が濃厚に影響している。「空き巣老人」を理解するには、こうした中国の現状もしっかりと見据える必要がある。もちろん、父母と子という3人家族は、なにも中国に限ったことではなく、少子化の日本でも珍しくない。だから3人家族が直ちに「空き巣老人」の社会問題に直結するわけではない。子どもが成長して勉強、就職、結婚等の理由で親元から離れるとき、程

度差はあれ、どの親も一様に「さびしさ」を感じるであろう。だがこのような感情の内に成長を見守る、期待するなどの感情も含まれるならば、さほど懸念するに及ばない。日本の3人家族にはそれが当てはまる。日本社会では子が「巣立つ」ことは好ましいことで、親はその日が来るのを今か今かと待ち望んでいる節がある。しかし、こと中国においては、3人家族から「空き巣老人」への転換にはどうしても悲観的なイメージが付きまとう。それはなぜか。

この問題を考えるためには、先ほどの「空き巣老人」の説明に注意する必要がある。「不眠、自律神経異常、高血圧、冠状動脈心臓病、消化性潰瘍などの病気…心身の介護が必要」などの徴候は高齢者に特有なものである。このことから、あらゆる「空き巣老人」ではなくて、中年を除く「高齢者」だけが問題となっていることが分かる。因みに、現在中国には65歳以上の高齢者が1.6億人おり、うち「空き巣老人」は5割以上を占めると言われる。今後高齢者人口の増加につれて「空き巣老人」も確実に増加し、その比率も一段と高くなるであろう。21世紀半ばには90％に達するという予測もある。

自分の唯一の子どもがいなくなれば親が「さびしがる」のは当然である。だから「一人っ子政策」を廃止すれば「空き巣老人」の問題が解決すると考えるのは、いささか早計である。中国には昔から子宝に恵まれることを「多子多福」といって持てはやす風潮がある。豊富な労働力が潜在的な経済力となるように、多子の親は少子の親よりも豊かになるとされる。日本社会が将来に不安を抱える最大の要因はこの少子化、つまり生産人口の減少にある。非生産人口が生産人口を凌駕すれば、年金や医療保険等の社会制度はいずれ破たんする。このように少子化は国の存亡にかかわるだけに深刻である。この視点からすれば、少子化よりも多子化のほうがよいように思われる。

しかし経済発展によって社会が豊かになると、社会的な制圧とは無関係に少子化が求められる。事実、欧米や日本などの先進諸国はいずれも少子化である。

中国においても北京や上海などの大都市では、すでにこうした傾向が一部認められる。子どもに最善の教育環境を提供しようとすれば経済負担も大きいので、おのずから子どもの人数も制限されてくる。これが実情のようである。だが中国の「空き巣老人」に関しては別の面も考慮する必要がある。

3.「養児防老」の背景

「空き巣老人」は中国では大きな社会問題として扱われるが、日本では高齢者の「空き巣老人」(＝単独ないし夫婦のみの高齢者世帯)であってもそうではない。これにはどのような事情があるのだろうか。

中国には「養児防老」という言葉もある。これは親が子どもを養い、子どもは死ぬまで親の面倒をみるという意味である。儒教道徳がその根底にある。日本でも高度経済成長期以前には、こうした道徳は当然なものとして受け止められていた。現在の中国と共通する点は次のとおり。まず戦後復興期に当たり日本全体が比較的貧しかった、次に当時の出生率(S.24/4.32[4])から伺えるように多くの兄弟姉妹がいた、第三に老人ホームなどの社会施設がほとんど存在していなかった、など。これらのことから、どのような高齢社会対策が当時求められていたかが推察できる。すなわち、自宅介護を基本とし、高齢者問題を家族問題とみなす立場である。

親を老人ホームに入れるのは親不孝だとする社会風潮は、戦後復興期から高度経済成長期にかけて普通に見られた。1960年代は住宅事情もまだよくなく、隣近所の噂が一緒くたに耳に入ってきた時代である。そうでなくても日本人は他人の評判を気にするので某家の親が老人ホームに入居したと聞けば、子どもは大罪人のように陰口を叩かれたものだ。

そうした風潮は、その後の社会理解も進んで[5]、現在では一応解消しているが、親を老人ホームに入居させた子どもは、どことなく罪悪感に駆られる。こ

れには最期まで自宅介護を続けた子どもが、マスコミ等によって賛美されるという社会風潮も少なからず関係していよう。道徳は残酷なものでもある。老人問題が家庭から解放されて社会問題へと一般化されたのはよいとしても、「高齢者」や「家庭」までもが一般化されるようになった。今日でも古い因習は影響力を持ち続けている。『黄落』の中で筆者が別居老親を見舞う際に隣の老女を憚っている個所がある。[6)]これなどを読むと「世間の目」は今でも変わっていない気がする。

こうした日本事情はそのまま現代の中国にも当てはまる。最近は徐々に変わっているが、中国でも老人ホームに親を入居させることを「不孝」とみる傾向がある。また老人ホームへの入居は子どもに捨てられた証だと考える親もいる。そうした考え方は都市よりも農村でいっそう根強い。多くの中国老人は、晩年を子どもや孫と一緒に過ごし、家族に見守られて死ぬことを幸せだと思っている。終末期医療にもこの影響が見て取れる。中国でも安楽死が数例行われているが、それらが純粋な意味で安楽死と言えるかどうかは疑わしい。安楽死は病院で行われるのが普通である。しかし中国人の多くは、医療費負担のこともあって、病院よりも自宅で死ぬことを強く願っている。それゆえ安楽死が行われるとしたら自宅になる可能性がある。そうなれば安楽死要件を満たしているかどうかを客観的に判断できる者がいなくなるであろう。

いずれにしても、中国では今後とも自宅介護が中心にならざるをえない。この点は日本と大きな違いである。日本ではまだ不十分ではあっても、老人ホームなどの社会施設は以前と比べてかなり増え、介護サービスも充実してきている。これにひきかえ中国では老人ホームや介護スタッフの数は社会的ニーズをはるかに下回っている。これは経済成長と老齢化の同時進行のゆえに高齢社会対策が後手に回っていることによる。それゆえ現実的にも自宅介護を中心にせざるをえないのである。とすれば「空き巣老人」の増加傾向がいかに深刻であ

るかは言うまでもないであろう。子どもは親元を離れた後に古巣に戻ることはない。つまり、「空き巣老人」が高齢化して「独居老人」となってもその受け皿が外にも内にも用意されていないのである。

しかし現在はまださほど深刻ではない。中国では一般に60歳以上が高齢者とされるが、彼らは改革開放以前の世代なので複数の子どもがいる。またこの世代の子どもたちは就職、勉強、結婚等による移動も少なく、老親の近辺で生活している場合が多い。したがって「空き巣老人」が本当に深刻なのは、1980年以降に生まれた一人っ子世代の親である。いわゆる４－２－１世代である。[7)]

だが改めて考えてみると、４－２－１の家族構成が特別でないことが分かる。事実、日本ではこうした家族構成は至る所に見られる。もっとも、先述のように日本の場合にはこうした事態は「一人っ子政策」とは異なり、各人の自由意思によってもたらされた。そのことは措くとして、４－２－１が中国で深刻なのに対して、何ゆえに日本ではそうではないのか。この点が日中の比較研究において重要である。簡単に言えば、高齢者の経済的自立力の差である。日本では社会福祉の発展によって経済的自立が比較的容易なのに対して、中国では物価の高騰に見合った年金を貰えないので、他に収入や貯蓄がなければ、経済的自立が難しく、したがって子どもからの援助を必要とする。もっとも、お金の問題だけであれば、子どもが定期的に親に送金すれば済むであろう。それゆえ問題の本質はもっと別のところにあるように思われる。

４．「輪流」の一事例

中国語の「輪流」は「かわるがわる、順番に」という意味である。[8)]例えば「轮流看管耕牛」と言えば「かわるがわる役牛の世話をする」という意味である。[9)]このように子どもたちが交代で老親の面倒をみるときにこの語が使われる。これには二通りのタイプがある。老親に３人の子どもがいると仮定して、老親を

P、子どもたちをC1、C2、C3として表せば、PがC1→C2→C3→C1…の輪番で一か月ごとに[10]子どもたちの家を転々とする移動タイプと、もう一つはPの家に子どもたちが輪番で同居する固定タイプとがある。両タイプに共通するのは、当番を外れた局外者たちが扶養費を負担する点である。その額は話し合いで決められる。移動タイプは老親が自分自身の家を持たない場合に採用される。また固定タイプは子どもたちが老親の近くに住んでいる場合にのみ有効である。老親からすれば、固定タイプのほうが移動タイプよりも心理的負担が少ない。また固定タイプでは自分自身の家を持つ老親が対象になるので、移動タイプよりも経済的に恵まれていると考えられる。以下は固定タイプの「輪流」の一例である。[11]

*　*　*

Aさんは1928年生まれの83歳の女性である。彼女は中国重慶市X区の出身で、約20年前に現在のY区に移り住んだ。未亡人となったのもこの頃である。子どもは男が１人、女が４人である。長女のEさんは59歳、二女のFさんは57歳、三女のGさんは56歳、長男のMさんは53歳、四女のKさんは50歳である。Aさんは料理、洗濯、風呂、排泄などの日常の生活能力に欠ける重度認知症である。耳の聞こえは悪くなっているが、目や歯は丈夫なので介助なしで食事を摂ることができる。内臓も丈夫で身体的には健康である。ただ便秘がひどく、1週間ぐらい通事がないこともある。そのときには薬を服用する。脊椎手術後に歩行が不自由になり、杖と車椅子に頼る生活に変わった。認知症の兆候は以前からあったが、それが避妊手術によるものなのか、薬の副作用によるものなのかは不明。子供時代の話を繰り返すだけで、双方向のコミュニケーションができず、子や孫の名前も分からなくなっている。

Aさんは2006年に脊椎の手術を受けて２、３か月間入院した。退院後もしばらくの間寝たきりで、痛みや麻痺のために自立生活が困難になった。そのと

きKさんが２か月間Aさんの面倒をみたが、仕事との両立が困難になり他の兄姉に事情を訴えた。当初は老人ホームへの入居も視野に入れたが、Aさんが強く拒んだので自宅介護の方向で検討された。そしてFさんが固定タイプの「輪流」を提案し、Aさんも同意したので、Gさんを除く４人の兄姉でAさんの面倒をみることになった。生活費としてAさんの年金が充てられた。最初は一カ月500～600元の予算でスタートしたが、その後物価の高騰もあって、現在は1000元の予算である。予算が少し超過した場合には当番者が負担し、大幅に超過した場合にはAさんの貯金を充てた。

Aさんの日課は次のとおり。毎朝7:00頃起床。その物音でFさんも起き、Aさんの着替えや洗面の手伝いをする。Aさんは自力ではウガイをすることができない。ときどき深夜の２時か３時に起きだして、厨房の窓から外に向かって怒鳴ったり、テーブルを持ち上げて上下に揺すったり、水道の蛇口に手を翳して水遊びをしたりする。Fさんはその物音で目が覚めるが、無理矢理やめさせると喧嘩になるので、Aさんをなだめながらベッドに連れていき寝かせるという。

Aさんは朝食前に30分ぐらい近所に散歩に出かけてゴミを拾って帰る(習慣化)。木屑や紙屑など色々なゴミが前掛けのポケットに詰め込められている。Aさんがゴミ拾いをするのは、ゴミがまだ使えると思っているからであって、路上をきれいにするのが目的ではない。[12]これらの奇行は2年前に重度認知症になったときから始まった。

朝食は8:00頃に開始。豆乳、揚げパン、麺、雑炊などが朝食メニュー。食欲は普通にあり、朝昼晩の３食とも平らげて残すことはない。嗜好ははっきりしており、嫌いな食べ物を避けて好きな肉類だけを食べようとする。朝食後Fさんは近所の露店市場に買い物に出かけ、Aさんもゴミ拾いに出かける。[13]

昼食は12:00頃開始。昼食メニューは朝食と同じである。昼食後、FさんはA

さんと一緒に散歩に出かける。[14]散歩コースはだいたい一定である。Aさんは Fさんの制止を振り切ってときどき道路の中央を歩き始める。Aさんには危険認識があるようだが、自分からは絶対に譲ろうとしない。[15]また散歩途中で色々なゴミに興味をもつが、有料の物には興味を示さない。[16]15:00～16:00頃帰宅。夜眠れなくなるとの理由から昼寝をさせないし、Aさんにもその習慣がない。しかし座りながらうたた寝をすることもある。そんなときには意識的に声をかけて起こすようにしている。[17]

夕食は18:00頃開始。食事メニューもあまり変わりばえしない。来客や祭りや行事があるときには特別料理になる。[18]食事中テレビは付けっぱなしであるが、Aさんはときどきテレビに向かって怒り出す。食事の片付けをした後、19:00～20:00頃にFさんはAさんの体を拭いてベッドに寝かせる。[19] Aさんが朝まで目覚めることはめったにない。

*　*　*

以上がAさんの日課である。Fさんは午前中の買い物と夕食後のダンスを楽しみにしている。それは買い物やダンスに出かけることでストレス解消にもなるからだ。近所の市場やスーパーが買い出し場所になるが、そこには年来の知り合いも来ている。彼女らは会えば立ち話をする。当然自分たちの老親介護が話題になる。例えば「昨夜うちのおばあちゃんは大変だったのよ」と話を切り出せば、相手は「それならまだいいよ、うちのおばあちゃんなんかもっと大変よ」と受け答えをして、話が盛り上がる。こうしたやり取りを通じて介護人は自分の立場を相対化できる。他の家では老人が夜中に徘徊するという噂を聞けば、自分の家はそうではないと安堵する。そうした情報交換は介護人のガス抜きや鬱憤晴らしになる。また夜行ダンスも体全体を動かすのでストレス解消になる。ただの井戸端会議でもあっても、自宅介護に疲れている者には気休めになり有意義である。ここにはある種江戸時代の銭湯文化に似た「場」が認めら

れる。[20)]

些細なことでFさんとAさんはしばしば衝突する。排泄抑制がきかないときや、ごみ箱からゴミを拾ってきたときには、Fさんもさすがに我慢できなくなる。そのようなわけでストレスも溜まり、介護当番が終わればほっとする反面、当番月が近づくと憂鬱になるという。Aさんを入院させて楽になりたいというのが本音のようである。しかし老人ホームに入居させても、認知症高齢者は周囲から嫌われて苛められるのが落ちだから、痴呆が進んだ段階からの入居には問題があり、それよりは現状の「輪流」のほうがましだと、Fさんは考えている。

5．若干のコメント

私が知らないだけで、探せば日本のどこかに固定タイプの「輪流」を見いだせるかもしれない。「空き巣老人」から「独居老人」を経てこのような「輪流」に至るには、親の持ち家と何人かの兄姉があり、しかも彼らが一定地域に固まって生活している必要がある。事例ではこうした条件がすべて整っている。しかし入学・進学、就職・離職、結婚・離婚、住宅取得などの理由で、子どもが親元を離れて生活する可能性は世代を追うごとに高くなる。そうなれば今後次世代が「輪流」を継承していくのはますます困難になるだろう。

そうした困難さは一人っ子世代が養老の担い手となるときにピークに達する。もはや原理的に「輪流」が成立しないので、残された選択肢は老親と同居するか、老人ホームに入居させるか、のいずれかである。しかしそれも自身の仕事や家族との絡みで、同居したいと思っても現実には色々な制約がある。一つに、老親が農村で生活し、子どもが都市で生活する場合、都市農村間の移動が双方にとって難しい。二つに、一人っ子同士の夫婦の場合、配偶者もこれに似た家族関係を抱えるから、一方の老親だけが同居するのは難しいし、ましてや両方の老親が一緒に同居するなどは、夫婦が相当の高額取りか資産家でなけ

ればとうてい不可能である。平均的な夫婦は、経済的には住宅ローンや子どもの教育費を捻出するだけで精一杯だし、よしんば養老できるだけの経済力があっても、日々老親の面倒をみる時間もゆとりもないのが実情である。つまり、老親の面倒をみるためには、お金と時間の両方が必要なのである。事例の「輪流」は兄姉が協力し合うことでこの条件を満たしているといえる。

このように考えると、一人っ子世代が自分の手で老親の面倒をみるのは大変に難しいことが分かる。自身の死によって「家」が消滅するのを覚悟の上で独身のままで老親のために「孝」を尽くす以外には不可能なのかもしれない。しかし老親が重度認知症や寝たきりになった場合には、自分がすでに年金生活者であれば別だが、まだ第一線で活躍中であればやはり施設に預けるほかないであろう。[21]中国政府は人口抑制政策の犠牲になった一人っ子世代のためにも、「孝」の復権を唱えるだけでなく、社会的な受け皿作りを急ピッチで進めるべきである。それが中国政府の喫緊の課題である。

事例の「輪流」は自宅介護の在り方を考える上でも参考になる。Aさんは重度認知症のゆえに正常な態度をとることができなくなっているが、「ゴミ拾い」という奇行を日課にしている。身内はその奇行に汚辱や嫌悪を感じているが、そもそも清濁観念は人間が決めたものである。Aさんにはそうした清濁観念よりも実用観念のほうがより重要である。Aさんの青春時代は今日のように物に溢れた時代とは異なり物不足の窮乏時代であった。だからAさんには、まだ使用可能な物が捨てられているのは「もったいない」のである。問題はそれがまだ使用可能であるのかどうかという線引きである。人間は年を取るにつれて「捨てる」ことができにくくなる。それは単に物質的な問題ばかりではない。精神的にも色々なもので自分の周囲を飾りたてたがる。それは基本的に「不安」だからである。その結果が「捨てる」よりも「拾う」という行為に端的に現れている。裏返して言えば、それこそ生きようとする人間の本能である。同様の

ことは、Aさんが嫌いな食べ物を避けて好きな肉料理を食べたがるところにも現れているし、また路上中央を闊歩するところにも現れている。人間が車を恐れて道の端を歩かなければならないというのは文明社会がもたらした逆説である。私には痴呆が隠された真理を露わにしているように思われる。

介護人のFさんについても見るべき点がある。彼女は午前に露店市場に出かけ、午後に老親の散歩に同行し、帰宅後は趣味に時間を費やし、夜にダンスに出かける。一見単調のようだが、時間を老親のためだけでなく自分のためにも上手に使っているのが分かる。介護と言えば他人や社会のための奉職のように受け取られがちである。それは悪いことではないが、介護士をそうした目で見るのはやはり問題であろう。介護士は聖人でも君子でもない。昨今日本でも過度のストレスを抱えた介護士が認知症高齢者を虐待したことが報じられて世の中に大きな衝撃を与えた。この点からすれば、Fさんは老親介護を自分の人生サイクルの内に上手に取り込んでいるといえる。彼女が介護の合間に作った私製のスリッパは市場に出してもおかしくないほどの見事な出来栄えである。同じことはMさんについても言える。Mさんは男性ということもあるが、昼食後の余暇を自身の遊びに費やしている。その間、Aさんは放置されることになるが、そのことを他の兄姉はだれも咎立てたりはしない。Aさんにとっても、Mさんにとっても、他の兄姉にとっても、それが自然なことなのだ。

このように「輪流」の事例からは、介護を挟んで看る側にも、看られる側にも独自の実存時間が流れていることに気付かされる。それは長江の流れのようにゆったりと静かに流れる時間である。こうした時間の流れの中にこそ本来人間は住むべきである。時間は直進的に流れるものだが、介護に合った時間があってもよい。それは伸び縮みもし、曲がりもし、くねりもする自在な時間である。

6. おわりに

介護経験のない者が「介護」について口を挟むのは極力避けるべきであるが、中国の自宅介護の実態調査をして気付いたことは、社会施設や専用のスタッフが必ずしも介護の基本ではないということである。もちろん、高齢者介護の専門家や助言者は必要であろう。また日本は超高齢社会を迎え、この方面での研究や技術開発を一段と求められている。だが「場」のない介護は早晩崩壊するに違いない。「自宅」や「家庭」は個々人の生活史が満載された究極の「場」である。認知症高齢者はこの「場」を通じて過去を反芻する「物語」を完成させる。それが永遠回帰の物語であっても、認知症高齢者の「生」は已むことなく生き続けることができる。戯言として一笑に付すこともできよう。だがよく考えてみると、正常だと思っている我々自身の「生」が彼ら以上に充実しているかどうかは甚だ疑問である。私には彼らの痴呆的な「生」のほうがはるかに充実して見えるのである。

(付記)本論文は文部科学省科研基盤研究(C)一般「老後生活のQOLと「場」に関する日中比較研究」(課題番号 21520015、研究期間2009年度－2011年度)の研究成果の一部である。

註

1) 小学館『精選版　日本語大辞典』2006年。
2) http://baike.baidu.com/view/715161.htm 「一般是指子女离家后的中老年夫妇」。
3) http://home.hiroshima-u.ac.jp/fmatsui/kaken2008.pdf　松井富美男編『平成18～20年度科研費報告書　生命倫理的観点からの「老い」に関する日中比較研究』92頁参照。
4) 内閣府『平成18年版　高齢社会白書』11頁参照。
5) 松井富美男「老いの研究－生命倫理の観点からの老い像を求めて－」『広島大学大学院文学研究科論集』(第68巻) 2008年　7頁参照。

6）左江衆一『黄落』新潮文庫　1999年　13頁参照。
7）「4－2－1」というのは、夫婦2人が4人の親と1人の子どもを養うという意味である。
8）愛知大学中日大辞典編纂処編『中日大辞典』大修館書店　1987年。
9）同書。
10）「一か月交代」が最も一般的であるが、それも話し合いで決められる。
11）以下は、Fさんからの聞き取り調査にもとに筆者がまとめ、その内容を本人に確認してもらい同意の上で公表するものである。なお、個人情報保護のために匿名にしてある。
12）Fさんは、無理矢理にゴミを取り上げると喧嘩になるので、「私も欲しいからください」と頼んでAさんからゴミを受け取り、後でこっそり捨てるようにしているという。
13）Aさん宅付近には野菜、魚肉、果物、雑貨類などを売る、昔ながらの露店が立ち並ぶ。値段は概して市価よりも安い。地元の人は町中に繰り出さずに日々の食材をここで買い求める。Fさんも安くて良質の食材を求めてここに来る。毎日1時間以上かけてゆっくりと回った後に帰宅し、昼食の支度に取り掛かる。これで午前中の日課はほぼ終了。
14）Mさんが当番のときにはAさんを一人にして遊びに出かける。その間Aさんはゴミ拾いに出かける。唯一の息子であるMさんがAさんには一番可愛らしいと見え、子どもたちの中で名前を憶えているのは彼だけである。
15）一般に中国社会は交通マナーに欠ける。幹線道路を除く普通の道路では赤信号であっても車や人が自由に往来し、さながら無秩序な状態である。「交通ルールを正しく守るとかえって危険なのは、世界でも重慶だけである」などという冗談も囁かれている。
16）紙幣の種類(例えば1元、10元、100元など)を区別できないが、紙幣になんらかの価値があることは分かっているようだ。
17）帰宅から夕食まで1、2時間の余暇があるが、Fさんはその間裁縫やスリッパ作りやセーター編みをして過ごすか、近所の人と雑談して過ごす。この間、Aさんはまたゴミ拾いに出かけて夕食前の18:00頃に帰宅する。
18）兄姉や孫たちが訪問に来て一緒に食事をすることもあるが、めったに長居をしない。
19）Aさんの就寝を見届けた後、Fさんは公園の広場にダンスに出かける。彼女の知り合いも多く参加するので、趣味とストレス解消になるという。
20）松井富美男「老いの「場」の研究－自殺防止のための「場」を求めて－」『広島大学大学院文学研究科論集』(第70巻) 2010年　8－11頁参照。
21）中国では、老人ホームと老人病院を厳密に区別している。原則として重度認知症高齢者は老人ホームに入居することができない。そのような高齢者は「病人」として扱われ、精神科病棟に送られるのが普通である。しかし軽度の認